

## 待降節 第4主日 ルカ1:26~38 お告げ

今日はお告げの場面が朗読されました。マリア様個人だけでなく教会にとってもとても大切な箇所なので掘り下げてみます。マリア様は、ガリラヤ地方のナザレという村の出身です。今でもイスラエルの北の方にこの村は残っていて多くの観光客が訪れています。今でも5千人に満たない人口なので、マリア様の時代には数百人程度だったでしょう。マリア様は、土曜日に村の会堂で開かれる聖書朗読の集会に出席し、説教の中で説かれるイスラエル民族を助ける救い主が間もなく誕生するという預言を何度となく聞いていたでしょう。マリア様は、他の娘たちと同じように、家事をしたり、畑仕事を手伝ったりして、貧しいながらも信仰深く育ちました。この地方の習慣に従い、12~15歳ころにヨセフとの結婚が決まりました。

天使ガブリエルがマリアに告げた最初の言葉は「おめでとう」でした。ラテン語で「アヴェ」、日本語で「めでたし」と訳されていましたが、元の意味は「喜びなさい」です。天使は続いて「マリア」ではなく「恵まれた方」(ルカ1:28)と呼んでいます。マリアは、人類の中でも欠けの無い完全な恵みに満たされます。「主があなたと共におられる」は、旧約の頃から神が誰かを選びだし、大切に、また困難な使命を委ねる時に使われる言葉です。(創世記31:3、出エジプト3:12、ヨシヤ記1:5など)

ガブリエルのお告げに、マリア様はいつも会堂で聞いている救い主が間もなく生まれること、しかも自分がその母親になることを悟ったはずです。会堂で聞いてきた救い主がこの世に来られるのは素晴らしい出来事としても、自分はまだ婚約中です。マリア様の中にもさまざまな不安がよぎったでしょう。「お腹が大きくなるとすれば周囲がどう思うでしょう?」「誰も聖霊によって身ごもったなどという話を信じるのでしょうか?」・・・普通なら、姦通の罪で石殺しにされかねない状況です。簡単に「はい」などと答えられるのでしょうか?

ガブリエルのお告げにマリア様はギリシア語でディエタクティエという言葉で反応されます。「何のことかと考え込んだ」(新共同訳)と訳されていますが、深い動揺を表します。東の国からやってきた博士たちから、新しい王の誕生を聞かされ、ヘロデが狼狽したときにも同じ動詞が使われています。(マタイ2:3) うろたえたヘロデはベツレヘムとその周辺一帯の2歳以下の男子を皆殺しにしてしまいます。ヘロデにとってそうであったように、マリア様にとっても人生を覆す脅威でした。けれども、一瞬動揺しましたが「なりますように」とお告げを受け入れます。この言葉は原文のギリシア語では希求法で書かれていて「是非そうなりますように」というニュアンスがあります。決して、嫌々受け入れるのではありません。動揺しましたが、喜んで自分を神様に差し出します。マリア様のこの態度が新しい救いの世界を開きます。お告げの場面は人類の救いの幕開けになってとても大切な場面だし、ゾクゾクしてきます。

1999年当時、12年も会社で勤めたのに、今更修道会に入ることなどできるだろうか? と不安で一杯でした。決心できたのは、レジオ・マリエの集会で唱えていた「わたしは主のはしため、おことばのとおりになりますように。」のマリア様の受諾の言葉です。マリア様は自分の身に降りかかる困難を忘れて、喜んで神の救いの協力者になります。後先のことを考えていません。自分にできることは何でも「主のはしため」として奉仕する覚悟を決めてしまいます。私も、この態度を倣いたいと願いました。

私たちも、ことあるごとに「わたしは主のはしため、おことばのとおりになりますように。」と唱えましょう。大きな決心にはマリア様の態度を身近に感じていることが大切です。

間もなく、降誕祭です。マリア様の覚悟を心に刻んで、新しい救いの時、お祝いの時を迎えましょう。